

大学英語教育における「新しい」教育の試み：教師 の実践と考察から

井上, 奈良彦
九州大学大学院言語文化研究院

<https://hdl.handle.net/2324/7360089>

出版情報：大学教育. 9, pp.61-79, 2003-03. 九州大学大学教育研究センター
バージョン：
権利関係：



大学英語教育における「新しい」教育の試み

— 一教師の実践と考察から —

九州大学大学院言語文化研究院 井上 奈良彦

1. はじめに

言語文化研究院を中心とした外国語教育における多用な試みの一部を筆者の具体的な授業例を中心に紹介するとともに、大学低年次における外国語教育、特に英語教育のあり方を提案したい¹。

筆者は 1995 年から九州大学言語文化部（現、言語文化研究院）に所属し、主として1, 2年生の言語文化科目 I（英語）を担当してきた。着任以前にも非常勤講師として同科目を担当していたので担当期間は約 10 年間にわたる。この間、様々な授業の試みを行ってきたので、特に最近の実践を中心に考察を加えながら紹介したい。

本論では以下順に、ディベートの導入方法、コンピューターの利用、アカデミック・スキルの基礎教育、授業に臨む姿勢、カリキュラム開発、という観点から見ていく。

2. 大学の英語教育におけるディベートの導入

英語でディベートを行うことは、大学の英語教育、特に言語文化科目 I のような低年次の多数の大学生を対象としては無理であるというのが従来の一般的な考え方であった。筆者は、ディベートの本質は何かということを再検討すると同時に、日本の大学の英語授業に導入する手法を模索してきた。

ディベートはいわゆる 4 技能をすべて訓練することができ、さらにクリティカル・シンキングのような大学教育の基礎となる態度・技能を養成することができる²。英語運用能力の訓練方法としては、ゲーム的な性質により学生の参加を促すことができる。たとえば、肯定側・否定側というロールプレーの中で行うことで人格攻撃にならずに議論ができる。勝負を学習の動機付けに用いることができる。決められたスピーチの時間が与えられることで、学生の発言の権利が確保されると同時に発言を促すことにもなる³。

2.1. ディベートの本質

ディベートとは何かという問には、さまざまな観点から異なった答えが可能である。英語教育の中での捉え方の一つは、高等学校の「オーラルコミュニケーション」という科目の中で扱われるよ

¹ 言語文化研究院においては外国語教育のあり方やカリキュラム改革について継続的な論議が行われており、新たな改革案も提案されている。筆者もカリキュラム改革などの作業に参加しているが、本稿の内容はあくまでも筆者の私見である。

² ディベートとクリティカル・シンキングの関係については Allen et al. (1999), Colbert (2002), Hill (2002), Kamada (2001) など参照。

³ 筆者は比較的早くから、日本の英語教育におけるディベートの効用を指摘してきた（井上, 1984）。

うに、口頭での対立する意見の交換を想定している⁴。教室でみんなの前で賛成側と反対側の話者が意見を言って反論をするという場面が典型的に考えられるだろう。これはもちろんディベートの一面を捉えてはいるが、残念ながら、ディベートとという大きな氷山の一角にすぎない。日本の英語教育の中でディベートを導入するには、ある意味で不幸な一面が注目されてしまったことになる。これが、学生の英語の口頭能力の低さや人前でしゃべるのを苦手とするような性向とあいまって、一般的な日本の英語の授業でディベートなどできないという固定観念を生む原因となってきたのである⁵。

これに対して、大学の英語教育の中で重要視されるべきディベートの見方は、「論理的な意思決定のために賛否両論を検討する過程」である。そこには、問題の設定、問題の分析、資料調査、議論の構築、反論・再反論の準備、等等の後に議論の提示や反論が行なわれ、それを第三者が聞いたり読んだりして意思決定を行う、という長い過程がある⁶。

2.2. 大学の英語教育におけるディベート導入方法

ディベートを長い準備を含んだ過程と認識すると、大学の英語の授業でディベートを用いる方法がいくつか考えられる。

- (1) 周到な準備に基づいて、口頭で議論の応酬を行うことを可能にする。
- (2) 議論の構築、反論、再反論という過程は準備段階で書きことばを中心に行い、口頭でのディベートは最後に、準備した原稿を発表するというプレゼンテーションと考える。
- (3) 口頭での発表は行わず、書面によるディベートを行う。

現在までのところ、筆者は1学期間に10数回の授業で行うという条件の下、(2)と(3)の方法を用いてきた。この方法では、比較的短期間で、一クラスの学生数にあまり関係なく、大学生の知的レベルに合った論題を取り上げてディベートをすることができる。単なる日常会話の練習ではなく、社会問題などについて調査をして英語で議論を作りあげるという授業は一定の成果を得ていると確信している。実際、学生からの学期末の反応の中には、「こういう授業こそ大学にふさわしい」というような評価を得ることが多い(学生の評価例を付録1に掲げる)。最近の授業で学生が取り上げた論題の例を挙げる。学生が様々な社会問題を自ら選んで調査し英語で議論しようとしたことがわかる。

⁴ 現行の『高等学校学習指導要領』(文部省, 1989)においては、「オーラルコミュニケーションC」という科目の内容の取扱いに、「レシテーション、スピーチ、ディスカッション、ディベートなどの場面を設定し、様々な話題を取り上げるなどの工夫をする」とあった。しかし、2003年度高等学校入学者から適用される新学習指導要領(文部省, 1999)では、同様の文言でディベートが言及されているのは英語各科目共通の言語の使用場面の一部としてである。コミュニケーションをより総合的に捉えようとしているようである。

⁵ もっとも日本の大学生の英語力も変化し、相対的には口頭能力も向上しているので、口頭のやりとりを中心としたディベートの実践も無理ではない。要はいかに段階的に指導していくかということであろう。筆者も2002年度後期には今までより教室で口頭活動を重視している。また、中学校におけるディベートの実践報告(中嶋, 1997)もあり、日本の学校教育の中で口頭のディベートが無理だというわけではない。

⁶ こういった過程全体を、ディベートより広い意味で「議論法(argumentation)」呼ぶ場合も多い(Ziegelmüller & Kay, 1997)。

Resolved: That Japan should abolish death penalty.
Resolved: That Japan should encourage people to have more children.
Resolved: That euthanasia should be legalized.
Resolved: That junior high school students should be allowed to have mobile phones
Resolved: That it is good to donate organs.
Resolved: That medical interns should be allowed to do a parttime job.
Resolved: That Japan should adopt a jury system.
Resolved: That Japan should stop further construction of atomic power plants.
Resolved: That the American war against Afghanistan is justified.
Resolved: That Japan should prohibit genetically modified food.

この方法では、即時性のあるスピーキングの指導は十分に行えないが、リスニングは重要な活動として組み込まれている。ディベートでは聴衆（審査員）が両チームの議論を聞いて要点のメモを取ることが求められている。授業でもビデオを見せてメモを取らせる練習をするとともに、学生がディベートを口頭で発表する場合は、発表チーム以外の学生に形式を決めたメモ用紙（フロー・シートと呼ぶ）を配り審査員として議論の要点を記録し優劣を判定させた。

具体的なディベートの進め方としては、まず肯定側チームが最初のスピーチを書き、それを否定側チームに渡す。次に否定側チームはそのスピーチを読んだ後、自分たちの最初のスピーチを書く。そこでは相手チームへの反論と自分たち独自の否定論を展開する。さらに、肯定側チームはそのスピーチをもらって、自分たちの第2スピーチを作る。反論された点への再反論と否定側独自の論点への反論を加える。以下、同様にスピーチを交換し、双方の最後のスピーチを担当する者は全体をまとめるスピーチの原稿を用意する。この過程自体、書面交換形式によるディベートであるが、さらにこの「台本」に基づいて「発表」を行う。これは発表者にとって英語でのプレゼンテーションの練習であるとともに、聴衆・審査員に回った学生にとっては、論題への賛否両論を聞いた上でクリティカルな意思決定を行う訓練でもある。

ディベートによる意思決定は、このように肯定・否定側の議論を聞いて第三者がより良い決定を下せるようにするという特徴がある。この意味では、その場で考えていいかげんなスピーチをするよりも、きちんとした議論を組み立てて用意したスピーチを発表するほうが、より良い意思決定の材料を聴衆に提供できると考えられる。

なお、授業のシラバス見本を付録2に挙げる。実際の授業のシラバスは、全学教育科目のシラバスシステム（<http://hesvr.rche.kyushu-u.ac.jp/syllabus/>）、および筆者のホームページ（<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/>）に掲載している。

2.3. 使用教科書

教科書は市販の教科書を用いるとともに、現在その大部分は Web で公開している自作の教科書（Inoue, 2001）を用いてきた。市販の大学生向け英語教科書の多くは、ディベートを取り入れているものでも、簡単なリスニングや内容理解の設問を中心にすることも多く、本格的にディベート

を導入するには不十分なものが多い⁷。また、本格的なディベートの教科書は分量が多すぎて1学期の使用には不適なものもある⁸。そこで、自分の授業に適した形の教科書を執筆し出したわけだが、英文でかなり詳しい説明を書いたために、これもまた満足のものではないことは認めざるを得ない。教科書を含め、今後の課題を次項で述べる。

2.4. 今後の課題

まず、ディベートについての説明の改善が課題である。英語でディベートをするのはもちろん、日本語でもディベートをしたことがない学生が多いため、どうしても授業の前半で説明が多くなってしまふ。できるだけ簡潔でわかりやすい説明が現在の課題である。一つの対策として、現在部分的に実施しているのは、ディベートの過程を明確なタスクに細分化し、それぞれについてワークシートのようなものを作り、これを基に授業は宿題を含め進めていくことである。このワークシートを中心とした教科書を完成させるのが当面の目標である。

次に、英語の使用について、現在、筆者自身はできるだけ授業を英語で行い、学生にはディベートの発表以外の質問などは日本語でもよいことにしている。問題は、英語での説明が必要以上に複雑になっているかもしれないので、上述の問題との関連でできるだけ簡潔な説明を目指したい。

また、学生が資料を調べるときは日本語の文献などの使用を認めているが、リーディングの強化を含めて英語の資料をもっと使うように、また、クラスによっては英語の資料のみを用いるようにさせることも考えている。この場合は、学生の負担も考えると、こちらから基本資料を与えるような対策も必要である。ただし、学生にグループごとに自由に論題を選ばせた場合、教師側の負担が増加する。また、学生が資料を探してくること自体の教育的意義が減じる。

口頭活動の強化も大きな課題である。現在、口頭での活動は用意した原稿を最後に発表することが中心になっている。もう少し準備の過程の途中で口頭での議論を行わせたり、あまり準備しなくてもしゃべれるような身近な論題を用いて口頭でのディベートを中心に行う授業を設定したりも可能性である。2002年度の授業ではこの両方から、授業で口頭活動を強化する工夫をしている。

このように、大学の低年次英語教育において「本格的な」ディベートは十分に実施可能なものであり、今後その実施方法をさらに改善していきたい。

3. コンピューターを利用した教育

言語文化科目を担当する中で、筆者がディベートの導入とともに労力を使ってきたのはコンピューターの利用である。本稿では、外国語教育に特化して導入された CALL 教室の利用について簡

⁷ 日本の出版社の大学英語テキストの中では、Matsumura et al. (1997)がディベートの解説は詳しいが、付属の練習問題が教科書自体の文章理解を中心に作られていて、ディベートの準備を助けるようなものになっていない。Motegi et al. (2001)はアカデミック・ディベートの基となる文献資料を使った議論の訓練は豊富であるが、試合形式のディベートの説明はないので、教員が手引きを作るなど別に教材が必要となる。

⁸ アメリカの中・高生向きなどのディベート教科書 (Goodnight (1993)など) は半期の授業では分量、特に解説の文章が多すぎる。英語学習者向きに書かれた *Discover Debate* (Lubetsky et al., 2000)もやや分量が多いのと議論の立て方や反論の仕方について定式化しすぎているきらいはあるが、筆者が使用した教科書の中では秀逸である。

単に触れたあと、ネットワーク上の仮想空間を利用した外国語教育の試みについて少し詳しく述べる。

3.1. CALL 教室の利用

120 番 LL 教室が CALL 化されたのを機会に、リーディングやリスニング中心の授業において、タスクの一部を CALL システムを利用して実施したり、Web を用いて関連情報を提供したりしてきた。資料として、過去のシラバスを添付する（付録3、付録4）。

3.2. Laputa Project への参加

学内 P&P 予算の補助を受けた言語文化研究院の情報化推進戦略プロジェクトであった Laputa Project（「サイバースペースを活用した国際言語情報の多元的研究と教育」）への参加を通して、1999 年から3年間、様々な形で授業においてコンピューター、特に 3D-IES の呼ばれる野村総研との共同開発システムを利用した。

プロジェクト参加者や言語文化研究院教官の認識は様々であろうが、このプロジェクトへの参加は決して個人的にコンピューターを授業で利用してみたいからというようなものではなく、言語文化研究院の戦略の中でコンピューターの利用や共同研究の促進が要請されていたのであった。実験段階にあるシステムを利用しての授業は綱渡り的であり、機械の不調などにより学生にも迷惑をかけたところがあったことは否定できない⁹。その中で、筆者なりに利用した方法は次のものである。

3.2.1. 文字チャット

使用当時のシステムの中心機能である、文字チャット（キーボードから入力）を用いて、自由なディスカッションやディベートにおける反対尋問（相手のスピーチに対する質疑）に利用した（付録5のシラバス参照）。学生のタイピングが遅いのせいもあり、チャットを用いて比較的複雑な会話を即時的に行うことは困難であるが、口頭でのディスカッションが苦手な学生にとって、参加機会を比較的確保しやすい利点はあった¹⁰。

なお、音声チャットについては、NHK 取材時の模擬授業やアジア学長会議での発表（Inoue & Suzuki, 2000）において試みているが、実際の授業では使っていない。

3.2.2. Web ページによる発信

システムの一部に学生の個人ホームページ作成支援機能があるので、これを利用して書面ディベートの Web 版（付録5にシラバス例、付録6に Web 版ディベート例）という形で、学生のディベートを公表させた。グループごとに選択した論題について肯定・否定両チームからのスピーチを順

⁹ このプロジェクトによる授業の積極的な評価は、改善点を含め、プロジェクト報告書（岡野・山内，2002）およびなど一連の論文（井上（1999），岡野（2000），鈴木（2001）など）で紹介されている。慎重な評価は同報告書および Takahashi et al. (2001) や井上他（2002）に提示されている。なお、このプロジェクトから発展した遠隔授業の試みも継続して行われている（岡野・山内，2002）。

¹⁰ 文字チャットにおけるコミュニケーションで何が起きているかの質的な分析は、井上（2002）参照。言語習得の量的側面（発話文の複雑さ）の分析は、高橋（2002）を参照。

に閲覧できるようにし、さらに1つのクラスでは他のグループを審査員としてその評価も公表させた。

現在のネットワークの技術や普及の程度を考慮すると、このような Web を利用した発表は有効な授業方法の一つであると考えられる。

3.2.3. オンライン自習システム

「ネットチューター」と呼ばれる TOEIC の模擬テストと自習教材を Web 上で提供するものである。主として、再履修者用の「英語特別演習」で補助的に利用した。スクリーン上でのリーディングなどの問題の提供と音声ファイルによるリスニングの問題がある。システムの不調や学生が利用できるコンピューターの制約などから十分な成果を上げたとは言えないが、自習教材提供や今後検討されるであろうプレースメントテストに有効な形態と考えることができる。また、システムには Web 教材のオーサリング機能もあるが、利用しなかった。

3.2.4. 遠隔授業

試験的に箱崎地区の言語文化研究院分室から六本松地区の教室の授業を遠隔で行う実験をした。チャットや Web の掲示版を利用して学生に指示し、学生のチャットや Web への発信は当然のことながらどこからでも監視できる。また、教室の様子も Web カメラを備えた教室 (135 番など) では別の場所からある程度監視できる。

言語文化科目 I の授業の中心はあくまでも生身の学生と教員が対面する教室での授業にあるべきだと考えるが、選択科目や社会人や留学生などが増えた場合の授業の一部に遠隔授業が取り入れられるのは時代の趨勢であろう (九州大学でも国際交流推進室で遠隔授業が戦略の一つと位置付けられていると聞く)¹¹。

4. アカデミック・スキルの基礎教育としての英語教育

学生にとって必修に等しい位置付けがされる低年次の英語科目の目的は、大学において学習・研究を進めていくための道具としての運用能力の養成が中心とするべきであろう¹²。大学入学前に6年間以上英語を学習していれば、一般的な運用能力は習得しているはずのものである。一定の目標に到達していなければ、補習のような形でその到達を確保すべきである。このようなアカデミック・スキルとしての英語教育はまた、クリティカル・シンキング (批判思考・論理的思考) などの訓練を含むべきである¹³。筆者の授業においてもこの考えに基づいて多くの授業の内容や教授法を考えてきた。特に次のような点を強調したい。

¹¹ なお、遠隔授業については、1996年にSCS衛星回線を利用して名古屋大学との間で合同のディベート授業を行ったことがある (<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/scs.html> 参照)。

¹² 学術目的のための英語教育 (English for Academic Purposes) については、Flowerdew & Peacock (2001)や Flowerdew (2002)に多様な観点の実践と研究が紹介されている。

¹³ 英語教育とクリティカル・シンキングの関係については、日本の大学英語教育学会 (JACET) でも研究会ができたり、論文も多い (Atkinson, 1997, 1998; Hawkins, 1998; Stapleton, 2002)。

4.1. リーディング

必要な情報をいかに探すか、文章の中から自分の必要な情報を素早く探せるか、まとまった文章の大意を把握できるか、与えられた情報の信憑性や文章中の推論の妥当性を検証できるか、などが重要と考える。共著で出版した教科書ではこのような考えに基づき練習問題を構成した (Inoue et al. 1997)。また、授業では、テーマを選んで参考文献のリストを作らせるような活動を取り上げた。九州大学共通教科書 (徳見他, 2000) などのリーディング用文章を用いる場合も、大意の把握や文章中の議論の検証に注意した。

4.2. ライティング

パラグラフの構成, 簡単な論文 (レポート) の構成, 書式, などに注意を払って指導した。また, 情報の出所を明確にさせるために, 引用や出典記載の方法に注意した。学生はこれまでに出典を明記してレポートなどを書くという訓練が欠けていると見受けられるので, 後者は重要な点である。教科書としては Becker (1992) のような学術論文の書き方の入門書を利用した。

4.3. リスニング

日常生活の題材だけではなく, 講義などを聞く際のメモの取り方なども指導した。ディベートにおいても, 前述のように議論の要点を聞き評価するという, アカデミック・リスニングの技能が重要である。講義などにおけるメモの取り方に特化した大学英語教科書としては Engetsu et al. (1990) がある。

4.4. スピーキング

日常生活の話題について話す訓練よりも, 社会問題などについてスピーチをしたり, ディベートをしたりするということを目標にした。前述のように, 会話の訓練ではなく口頭発表の訓練に終始しているのが現状であるが, 大学の英語授業としてはそういった学術やビジネスなどの場面で必要な技能の養成が大切である。

5. 授業に臨む姿勢

いままで述べてきた授業の方法や反省をまとめる意味を含め, 筆者が授業, 特に英語の授業に臨む姿勢を説明する。ここで述べていることはあくまでも個人的な姿勢であって, 近年の膨大な第二言語習得学の成果を必ずしも踏まえたものではない (Ellis (1994), 小池他 (1994), Lightbown (2000), Norris & Ortega (2000), Johnstone (2002) などの概観を参照)。

5.1. 大学生の知的興味に訴える

現在の学生の英語力運用能力を考えた場合, 言語的な能力と知的レベルの乖離が大きい, 言語的能力に合わせて題材を易しくするのではなく, いろいろな補助を工夫しながら, 知的興味に訴える内容を扱いたい。

5.2. できるだけ英語を使う

まず、教師が率先して英語を使う。授業の最初に「英語のほうが日本語より上手な者がいるか」というようなことを冗談半分で聞いている。教師である筆者を含め教室の全員が日本語なまりの英語を使っているのであり、いわゆるネイティブ・スピーカーのように話をしたりする必要は全くないこと、まず内容が伝達できるかどうかが大切である、というようなことを説明している。教師が苦勞しながらも英語を使うことは学生に対してそういった姿勢を示し、そういった態度の模範になることであるとする。

教師が英語を使うことは、学生のリスニングの訓練でもある。学生からも、初めは教師の話がよくわからなかったが、だんだんと慣れてきたというような意見ももらっている（付録1参照）。

学生の英語の使用に関しては、次項の問題とも関連して、強要しないようにしている。英語を使うことを求める場合も、その場で書いたり話したりするときは、「少しぐらい日本語が混ざってもいいよ」、と言っている。もうすこし学生の英語使用も強制してもいいのかもしれないが、今後の課題である。

5.3. 学生の参加を奨励する

ほとんどの大学生はこれまでの教育の中で、黙って座って教師の話を聞いていればいい、自分から積極的に発言しない、質問されても積極的には答えない、というような社会化が行われている。この雰囲気打ち破るために、できるだけ学生の発言を求めたり、発言しやすいようにリラックスさせたりすることを試みている。一方こういう姿勢は規律の低下を招きやすく、バランスを取ることが課題である。

5.4. シラバスの活用

全学教育のシラバスシステムを利用して事前の授業計画を発表するとともに、学期中もシラバスの内容の更新を行い、そこから関連情報や課題の指示などにリンクを張るなど、システムを活用してきた。特に選択科目においては、教師はできるだけ詳細な授業内容を事前に提示し、学生はその内容に同意した上で授業を受ける、という契約関係のようなものがある。この点では筆者の授業においてもさらに改善の余地がある。

5.5. 翻訳に頼らない

和文英訳にしる英文和訳にしる、「翻訳」は通常の学生には必要としない特殊な能力であると考えている。リーディングにおいても、理解が必要な文章をすべて日本語に翻訳するのは時間がかかる。ライティングにおいて、いったん日本語で複雑な内容の文章を作ってしまうと、それを英語に翻訳するのは至難の業であり、学生が自分のが使える表現を組み合わせて英語で文章を作りあげていくほうが易しいはずである。また、リスニングやライティングにおいて翻訳という過程を持ち込むと、実際の英語使用場面で機能するとは考え難い。全学教育では翻訳者を養成しているのではない。

5.6. 文法や語彙を体系的に指導しない

大学入学までに学習指導要領（文部省，1989，1999）が示す内容を習得していれば，文法の主要部分は学習済みのはずである。また，語彙も不十分とはいえ，自分で増やしていく基礎はできているはずである。そこで，大学の授業では文章などの単位での運用ができるかどうかの問題となる，というのが筆者の信念である。ただ，大学生の多くは文法能力も不十分であり（たとえ知識として持っていたとしても，自動化された運用能力としては機能していない），もう少し学生の実態調査が必要かもしれない¹⁴。

6. カリキュラム開発の必要性

最後に，全学教育における英語教育の向上のために，ぜひ体系的なカリキュラムの開発運営が必要であることを強調しておきたい。言語文化科目 I において，筆者自身の授業内容を含め，すべての英語授業は体系的に構成されたカリキュラムの一部を構成しているのではなく，担当教師が考えるところの「ニーズ」に基づいて，これが学生に必要なはずだ，という信念（経験的直感）に基づいて実施されているといってもいい。しかし，これでは学生の真のニーズを知りそれに応える授業が実施されているとは言えない¹⁵。

ここで，ニーズと言っているのは，学生がこんなことを学びたいと言っているとか学部の教官がこれを教えてほしいと言っている，というような主観的な認識ではなく，学生はこういう場面でこういうことを英語できる必要があるから，入学時の能力と比較してこれだけのことを習得させなければならない，というようなニーズである。

そのようなニーズが判明すれば，カリキュラムはそれに応えるための到達目標を設定し，その目標に到達するための授業内容を規定し，その目標に到達しているかどうかの評価を実施する，という形で体系化されなければならない。各教師や各授業はその体系を構成する一部分として機能しなければならない。

大学におけるすべての英語の授業が，このような形で体系化されなければならないとは主張しない¹⁶。ただし，現在の全学教育科目の言語文化科目 I に相当する部分はこのように体系化される必要がある。カリキュラム検討委員会や言語教育学講座でのニーズ分析の共同研究などにおいて，この考えに基づいて提案したり共同作業に取り組んだりしている。

7. おわりに

以上，簡単ではあるが，言語文化研究院の教官を中心とする外国語教育の種々の試みの一部を，

¹⁴ 谷口・松村（2001）参照。第二言語習得学においても，どのような文法指導が有効なのか諸説がある（Ellis, 1999, 特に Chapter 14 "Formal instruction and second language acquisition"）。

¹⁵ 外国語教育のカリキュラム開発・運営については Brown（1995）が体系的な解説を提示していて参考になる。

¹⁶ 個人的な夢としては，英語のディベートで全国優勝ひいては国際大会で優勝できるような人材を養成したいとか，シェークスピアを原典で鑑賞したり劇場で楽しめるような教養人も育ててほしいと思っている。大学において，多様な専門分野を持った教師が英語教育を担当する意義は，大学教育の共通基盤となる英語力を学生に保証できる体系的プログラムを提供した上で，各教師が夢を伝えられるような科目も提供できるところにあるのではないだろうか。

筆者自身の実践を踏まえて紹介した。また、今後の方向として、実証的なニーズ分析に基づいた体系的なカリキュラム開発・運営の必要性を強調した。

参考文献

- Allen, M. Berkowitz, S., Hunt, S., & Louden, A. (1999). A meta-analysis of the impact of forensics and communication education on critical thinking. *Communication Education, 48*, 18-30.
- Becker, C. (1992). *English thinking in English writing*. Tokyo: Nan'un-do.
- Brown, J. D. (1995). *The elements of language curriculum: A systematic approach to program development*. Boston, MA: Heinle & Heinle.
- Colbert, K. (2002). Enhancing critical thinking ability through academic debate. In K. Broda Bahm (Ed.), *Perspectives in controversy: Selected essays from contemporary argumentation and debate* (pp. 47-70). New York: International Debate Association.
- Ellis, R. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Engetsu, Y., Minai, M., Oshimoto, T., & Saijo, T. (1990). A guide to taking notes: Life in Britain and in America. Tokyo: Eichosha.
- Flowerdew, J. (Ed.). (2002). *Academic discourse*. London: Longman.
- Flowerdew, J., & Peacock, M. (Eds.). (2001). *Research perspectives on English for Academic Purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goodnight, L. (1993). *Getting started in debate* (2nd ed.). Lincolnwood, IL: National Textbook Company.
- Hill, B. (2002). The value of competitive debate as a vehicle for promoting development of critical thinking ability. In K. Broda-Bahm (Ed.), *Perspectives in controversy: Selected essays from contemporary argumentation and debate* (pp. 71-100). New York: International Debate Association.
- Inoue, N. (2001). *Debate: A process of inquiry and advocacy*. Web 版は <http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/debate-text.html> において閲覧可能.
- Inoue, N., & Suzuki, Y. (2000). Cyber campus beyond borders: Use of 3D-IES (Three-Dimensional Interactive Education System) for student exchanges. Paper presented at the 2000 Conference of Asian University Presidents, Kyushu University.
- Inoue, N., Suzuki, Y., & Kao, R-R. (1997). *Encounters in science*. Tokyo: Sanshusha.
- Johnstone, R. (2002). Research on language teaching and learning: 2001. *Language Teaching, 35*, 157-181.
- Kamada, H. (2001). Influences of debate training on its participants: Effects of critical thinking abilities. Paper presented at the 31st Annual Convention of the Communication Association of Japan.
- Lightbown, P. M. (2000). Anniversary article: Classroom SLA research and second language teaching. *Applied Linguistics, 21*, 431-462.
- Lubetsky, M., LeBeau, C., & Harrington, D. (2000). *Discover debate: Basic skills for supporting and refuting opinions*. Medford, OR: Language Solutions.
- Norris, J. M., & Ortega, L. (2000). Effectiveness of L2 instruction: A research synthesis and quantitative meta-analysis. *Language Learning, 50*, 417-528.
- Matsumura, Y., Ishii, T., & Lowe, D. L. (1997). *Enjoy debating*. Tokyo: Eichosha.
- Motegi, H., Hesse, S., & Suzuki, D. (2001). *Debating the issues: Opposing views on value topics*. Tokyo: Macmillan Languagehouse.
- Takahashi, S., Shimizu, T., Inoue, N., Suzuki, Y., & Yamauchi, S. (2001). Laputa Project: The potential of the 3D-Interactive Education System in college English education, *Proceedings of The Fourth Conference on Foreign Language Education and Technology (FLEAT IV)* (CD-ROM), pp. 429-435.
- Ziegelmüller, G. W. & Kay, J. (1997). *Argumentation: Inquiry & advocacy* (3rd ed.). Boston, MA: Allyn & Bacon.

- 井上奈良彦. (1984). 「Debate の擁護」. 『英語教育』 (大修館書店). 第 33 卷 9 号, 80-81.
- 井上奈良彦. (1999). 「21 世紀の仮想討論館をめざして—3D-IES を使った模擬授業とその後—」. 『国立五大学言語文化部シンポジウム報告書』. 九州大学言語文化研究院 (<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~call/symposium/inoue.html>).
- 井上奈良彦・志水俊広・鈴木右文・高橋里美. (2001). 「3D-IES (三次元仮想環境を利用した新教育システム) の英語教育への応用」. 『第 7 回日本コミュニケーション学会九州支部大会 Proceedings』 (日本コミュニケーション学会九州支部), 114-128.
- 井上奈良彦. (2002). 「CMC を用いた英語授業での学生のコミュニケーション行動分析」. 岡野進・山内正一 (編) 『サイバースペースを利用した国際言語情報の多元的研究と教育』, pp. 13-24.
- 岡野進. (2000). 「外国語学習と 3 次元仮想空間」. 『独仏文学研究』 (九大独仏文学研究会), 第 50 号, 69-81.
- 岡野進・山内正一 (編). (2002). 『サイバースペースを活用した国際言語情報の多元的研究と教育』 (平成 11 年度～13 年度 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト C タイプ 報告書).
- 小池生夫 (監修)・SLA 研究会 (編). (1994). 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』. 東京:大修館.
- 鈴木右文. (2001). 「3 次元仮想空間チャットシステム利用の英語授業における成績算出方法について」. 『英語英文学論叢』 (九州大学英語英文学研究会). 第 51 集, 27-38.
- 高橋里美. (2002). 「英語チャットにおける発話文の複雑化」. 岡野進・山内正一 (編) 『サイバースペースを利用した国際言語情報の多元的研究と教育』, pp. 25-43.
- 谷口秀子・松村瑞子. (2001). 「大学生に必要な英語力とは何か—文法・読解力神話を越えて—」. 『大学教育』 (九州大学大学教育研究センター), 第 8 号, 59-68.
- 徳見道夫・Rawlings, Peter.・大津隆広・鈴木右文 (九州大学大学院言語文化研究院英語共通教科書編集委員会). (2000). 『A Passage to English—大学生のための基礎的英語学習情報—』. 福岡:九州大学出版会.
- 中嶋洋一. (1997). 『英語のディベート授業・30 の技』. 東京:明治図書.
- 文部省. (1989). 『高等学校学習指導要領』. 1989 年 3 月 15 日文部省告示.
- 文部省. (1999). 『高等学校学習指導要領』. 1999 年 3 月 29 日文部省告示.

付録1 ディベートの授業への学生評価例

◎自分の感想・反省・ディベートに関する意見

- ・ 講義の過程で、最初のうちは、配布されるプリントはすべて英語、それに講義もすべて英語というのに驚き、そして、不安になり、ディベートなんて本当にできるのだろうか心配でした。参考として見せていただいたスライドを見ても、意見なんてほとんど理解できなかったし、今まで自分はどれだけ英語をやってきたのだろうと、くやしくてたまりませんでした。しかし、ディベートのテーマが決まり、班で検討するようになってからは、だんだんおもしろくなってきました。回数を重ねるごとに、和英辞典を頻繁に使わなくなっていったし、教官の英語の説明も、慣れてきたのでしょうか、言われている内容を把握できるようになりました。ディベートでは自分がスピーチするのも楽しかったけれど、他の班のディベートを聞くのも楽しいと思えました。私は今、英語表現演習がディベートで本当に良かったと思っています。久々に自分の頭で考えて、実際に書き、そして発表するという充実感を、得ることができました。
- ・ 他の班のスピーチを聞くときに、その場限りにならないように、しっかりとメモをとっておくべきでした。
- ・ 高校の時に頭にたたき込んだはずの単語の大多数がすでに抜けていて、辞書を引いては、「これは見覚えがあるぞ」という情けない状態でした。つまり高校までの知識がしっかり生かせていないということです。
- ・ 他の班のディベートを聞いて、ただ点数をつけるだけではなく、時間があれば、ここが良かったとか、それはおかしいなど、ディベートの内容や形式について、全員で議論してみたかったです。
- ・ ディベートの当日に、その班のスピーチ・レジュメを採点者全員（聞いている人）に配るとなおいい。（しかし、それでは、皆、レジュメばかりに気をとられて、スピーチを聞かないですね。その点から考えると、今回のディベートは、ヒアリング強化になって良かったと思います。）
- ・ これも時間があればなのですが、スピーチを行った班に対して、聞いている人の質問コーナーなども設けたら、おもしろくなりそうですね。
- ・ スピーチのときにジェスチャーを交えると、迫力があってよかったかもしれないです。脱日本人を目覚めます。

機会があれば、またディベートをやってみたいです。

長くなりましたが、以上で終わります。ありがとうございました。

* 文章は原文のまま、手書きを印刷文字に改めた。

** 文中に「スライドを見て」とあるのは、ビデオによるディベート視聴のことを指していると思われる。

付録2 ディベート授業のシラバス見本

Course Objectives:

1. Students will learn basic principles of academic debate.
2. Students will learn how to argue for and against a given proposition.

Textbook: Narahiko Inoue, *Debate: A Process of Inquiry and Advocacy* (Web version).

Optional Readings:

松本茂『頭を鍛えるディベート入門』講談社ブルーバックス (1996) 740円

Activities:

1. Many of the activities are conducted in groups of 5-6 students.
2. Each student prepares a file to keep assignments (homework), evidence and other researched materials, written speeches, and notes of activities.
3. In order to understand basic principles of academic debate, students will study the assigned chapters of the textbook at home.
5. Students will contribute ideas of topics for debate.
4. Students will analyze a proposition (topic) for classroom debates.
5. Students will find books and articles about the proposition.
6. Students will write speeches for and against the proposition.
7. Students will participate in debate in front of the class.

Grade:

1. Students are expected to attend all classes. If a student is absent from more than 3 classes, he/she will not receive the credit.
 2. Classroom participation (answering questions in class, etc.).....20%
 3. Research20%
 4. Written speeches20%
 5. Classroom debates.....20%
 6. Record of activities (file and/or notebook).....20%
- (There will be no Final Examination.)

Schedule:

1. Topic: Introduction (What is debate? Why do we debate?).
Activity: Watching a debate on video. Homework: Read Chapters 1 and 2.
2. Topic: Format and Proposition.
Activity: Making up groups. Homework: Make a list of several possible topics for debate. Read Chapter 3.
3. Topic: Analysis of Proposition (Defining terms and finding issues)
Activity: Deciding the debate proposition. Homework: Read Chapter 4.
4. Topic: Proof (Basics in Argumentation).
Activity: Exercise on argumentation. Homework: Read Chapter 5.
5. Topic: Research (Finding evidence)
Activity: Library tour. Research via the Internet. Homework: Make a list of references on the chosen topic (Due in 2 weeks). Read Chapter 6.
6. Topic: Affirmative and Negative Cases.
Activity: Brainstorming on the chosen topic. Homework: Read Chapter 7.
7. **Submit the initial research results. (Individual)**
Topic: Refutation and Rebuttal; Taking notes (Flowsheets).
Activity: Practicing refutation. Homework: Prepare for the 1st Affirmative and Negative Constructive speeches. Read Chapter 8.
8. Topic: Writing and Presenting Speeches.
Activity: Working on speeches in group. Homework: Write the 1st Affirmative and Negative Constructive speeches (Group work). Read Chapters 9 and 10.
9. **Submit the 1st Affirmative and Negative Constructive Speeches. (Group)**
Topic: Cross-examination. Evaluating debate.
Activity: Practicing cross-examination. Homework: Prepare for debates (cross-examination, 2nd constructive speeches, and rebuttals).
- 10-14. Debate 1 - 5.
15. Debate 6. Course Evaluation.
Submit the 2nd Affirmative and Negative Constructive speeches. (Group) Submit the individual file. (Individual)

付録3 CALL教室でのリーディング・リスニングの授業シラバス例 (テレビニュース教材使用)

総合英語演習 (S1-30)

Tuesday 4th Period (1st Semester, 1999)

Classroom: 120 (Language Lab.)

Instructor: Narahiko Inoue

Associate Professor, Institute of Languages and Cultures

Office: Ropponmatsu Main Building 5F Room 14

e-mail: inouen@ilc.kyushu-u.ac.jp homepage: <http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/>

Course Objectives

1. Students will improve various skills in communication in English.
2. Students will learn contemporary cultures in Asia through English news programs.

Tentative Schedule:

4/14 Introduction. Unit 1 [CNBC Asia](#) [SKY PerfecTV!](#) [Yahoo! Asia](#)

4/21 Unit 2

4/28 Unit 3

(5/5 no class)

5/12 Unit 3 [Yahoo! - Regional: Countries: Laos](#)

[EPICURIUS FOOD DICTIONARY](#) [All about Lumpia](#)

5/19 Unit 4 [Yahoo! Australia & NZ](#) [Ausflag - Australian National Flag](#)

[Reach Out! : Welcome \(suicide prevention\)](#) [Triple J \(radio station\)](#)

5/26 Unit 5 [Yahoo! - Health: Medicine: Plastic Surgery](#)

(6/2) [American Trend](#) An introduction to Plastic Surgery, Cosmetic/Aesthetic Surgery, Reconstructive Surgery, and Craniofacial Surgery

[ASPRS/PSEF Plastic Surgery Information Service](#)

6/2 Unit 6 [The Body Shop - Skin & Hair Care](#) (The Body Shop's Home Page)

(6/9, 16) [The Body Shop - Interactivist - Issues](#) (There's a picture of Ruby's face.)

The Body Shop Web pages does not have information about Ruby any more.

Stories about Ruby

(1)

They must be joking. Not The BodyShop, which set out to poke fun at the modern obsession for slimness with its roly-poly Ruby doll - alter ego of the pencil-thin Barbie. No, the joker is the MTR, whose executives apparently saw the shop's poster, and recoiled in embarrassment. Quite why is hard to understand. MTR stations are not exactly lacking in pictures of models in scanty bras and panties, posing seductively on hoardings. But present those who made the decision to ban Ruby with a picture of a naked jointed doll, formed from a series of unspecified bulges, and they seem to fear that the passengers could rush to complain. What is it about nudity that prompts Hong Kong to make a spectacle of itself? Ruby presumably got her name from the plump naked ladies portrayed in the classic paintings by Peter Paul Rubens which hang in art museums around the world. The Body Shop chose her to spread the word that there are billions of women who don't look like supermodels. That is a message worth repeating, when too many teenagers starve themselves trying to emulate their catwalk role models. It is certainly not a cause for banning a jolly-looking figure.

(Summary of "Out of Shape" *South China Morning Post*, 03/27/1998 in [Northern Light's Special Collection](#))

(2) [body \(i\)con: fighting back: ceo defectors, page 1](#)

(Page 2 has a picture of Ruby's poster. The pages were created as [part of the projects "Body Icon" in the New Media Program, Columbia University Graduate School of Journalism.](#))

(3) [ThirdAge - News - SEPTEMBER 4, 1997 - Ruby: Barbie with a Difference](#)

(4) [Barbie's New Bod, BFD](#) ("At the opposite end of the spectrum from Barbie, new or old, is Ruby,...")

(5) [Web Extra | October 16, 1997](#)

(6) [Web Extra](#) ("Rudy" a male version of Ruby)

(7) [The Weekly Nudesletter, Vol. 1, No. 1](#) (September 29, 1997)

(8) [The Weekly Nudesletter, Vol. 1, No. 11](#) (April 23, 1998)

If you cannot access to (2),(4),and (5), try [this link](#).

6/23 Unit 7 After the Bubble

6/30 Unit 8 The Sandwich Man

References on Asian economic crisis:

[Links to Asian and Global Crisis Homepage. Nouriel Roubini](#)

[The East Asian Crisis: Origins, Policy Challenges, and Prospects \(Speech\)](#)

[The Asian Crisis Home Page](#)

[アジア研トピックリポート「97年アジア通貨危機」](#)

[Out There News explores Asia's economic crisis](#)

Copy of a *New York Times* article "[Tracking the Asian Economic Crisis](#)" (January 19, 1998)

Links to pages of the Ministry of Foreign Affairs, Japan:

[Current Situation of the Asian Economic Crisis and Japan's Responses to it \(February 1999\)](#)

[Asian Economic Crisis and Japan's Contribution \(December 1998\)](#)

Articles about Sirivat V., the Sandwich Man:

[AB Nov 01, 1997 Testing times](#)

"After decades of rising expectations and incomes, Thais in all walks of life are being forced to lower their sights as the economic crisis wipes out savings and jobs. Find out how they are coping."

[BBC News | Business | Thailand's wealthy fall on hard times](#)

"Formerly rich businessmen are selling their flash cars just to get by during the economic crisis in Thailand."

[July 10, 1998 - PEOPLE](#)

"Sandwich-making proof that there is life after the Thai crash, Sirivat Voravetvuthikun has found plenty of interest in his survival skills."

[12/22/97 JOBS SHOCK IN ASIA](#)

"Layoffs could reach 2 million The Asian crisis is gaining momentum. In early December, the hopes for an early return to confidence evaporated. First, it became clear that the scale of South Korea's ..."

7/7 Unit 9

[Korea, South](#) (CIA's World Fact Book)

[Yahoo! Full Coverage:South Korean News](#)

[Out There News explores South Korea: the end of chaebol chumminess?](#)

Articles about Mr. SuhSang-Rok ([picture](#))

[April 24, 1998 - PEOPLE](#) (Asiaweek)

M. Schuman, "Turning the Tables, a Failed Exec Does Penance as a Busboy [sic: the story describes him as a waiter]," Wall Street Journal, April 9, 1998.

[Former chaebol vice chairman realizes 'unthinkable' dream of being a waiter](#) (The Korean Herald)

[Lexington Herald-Leader: Ex-executive waiting tables, redefining S. Korean honor](#) (from AP, March 1999)

[South Korean executive quits to wait tables, inspires more to do same](#) (from AP, March 1999)

[Executive-Turned-Waiter Shakes Up Korean Thinking](#) (Korea Times, March 16, 1999, from AP March 1999)

[The Korea Times Search Page](#)

Summer assignment: Units 9-11

9/?? Final Examination

Activities

We will try to cover one unit of the textbook in one class period. Students will be assigned to do homework. Some assignments will be turned in to the instructor in a written form.

We will try to obtain information about related topics from the World Wide Web.

Textbook

English by Satellite: Changing Asia (Macmillan Languagehouse)

Grading

1. Students are expected to attend all classes. If a student is absent from more than 3 classes, he/she will not receive the credit.
2. Classroom activities (answering questions in class, etc.) 40%
3. Homework 30%
4. Final Examination 30%

* 下線の項目は該当ページへのリンク。

付録4 CALL教室でのリーディング・リスニングの授業シラバス例

ENGLISH (Language Laboratory), Friday 2nd Period

Instructor: Narahiko INOUE
 Office: Ropponmatsu Main Building 5F No. 14
 Phone: 092-726-4667
 Email: inouen@rc.kyushu-u.ac.jp

Course Objectives:

- Students will practice on listening for information about everyday topics.
- Students will practice on reading for information in reading short science articles in newspapers
- Students will practice on finding information through the Internet.

Textbook: *Encounters in Science* by Inoue, Suzuki, & Kao.

Bring your own blank audio tape (C-60) and a floppy disk (3.5 inch 2HD).

Activities:

- Students listen to short recordings on various topics and answer exercise questions.
- Students are assigned to read a passage in the textbook and work on exercises to understand the writer's ideas.
- Students try to find information related to reading texts through the Internet.
- Students write short reports about the result of the information search activity above. This may be submitted to the instructor by an electronic means.

Grade:

- Classroom participation (answering questions in class, etc.)-----10%
- Quizzes-----20%
- Mid-term report-----20%
- Final report-----20%
- Final Examination-----20%

Tentative Schedule:

- 4/11 Introduction. Getting used to the CALL system. Exercise 2B
- 4/18 Listening Quiz
- 4/25 Listening Quiz
- 5/2 Listening Quiz
Encounters in Science, Unit 1
- 5/9
Using WWW (in Japanese)
What is WWW (in Japanese)
W3 (WWW) Search Engines
Search Result Example
- 5/16 Mid-term report 1. Encounters in Science, Unit 3
Links for Students
Learning English
Quizzes in English
Famous Personages in Japan
- 5/23 Homework: Unit 5. Encounters in Science, Unit 4.
Report format
- 5/30 working on the Internet search
- 6/6 working on the Internet search
- 6/13 Mid-term report 2. Encounters in Science, Unit 5
Homework for next week: Unit 7
Bring a blank C-60 audio tape next week. (recording for listening quiz)
- 6/20 Encounters in Science, Unit 7
Homework: Unit 8. Work on recorded tape for a quiz.
- 6/27 Listening Quiz (Tape Unit 6. Sports)
Homework: Unit 9
- 7/4 Listening Quiz (Tape Unit 7. Gambling)
- 9/12 Listening Quiz (Tape Unit 8. Sightseeing in Japan)
Homework: Unit 20
Bring a audiotape (Recording for Final Examination)
- 9/19 Final report (Paper + Floppy disk)
Final Examination (Listening)

* 下線の項目は該当ページへのリンク。

付録5 Web版ディベートシラバス例

水曜日 2 時限: インテンシブ英語演習 I (井上 奈良彦)

(前回更新日: 2002 年 1 月 23 日)

授業科目区分	言語文化科目 I
対象学生	1LA01001R - 1LA01022M
対象学年	Freshmen
授業科目名	インテンシブ英語演習 I
講義題目	Debating on the Web
開講学期	後期
開講曜日・時限	水 2
単位数	1.00
必修・選択等の別	
担当教官名	井上 奈良彦 Narahiko INOUE
所属	Faculty of Languages & Cultures
履修条件	
授業の目的	Students will learn to debate using various resources on the Web.
授業の概要	This is a writing/reading-intensive online debate class. Students will learn basic principles in academic debate and prepare reasoned arguments on various topics based on Internet and library research. The goal of the class activities is to set up English-language Web pages to present arguments for and against several controversial topics concerning today's Japan. Other activities using computers may be tried out in class. Throughout the process of debate, group work is emphasized. The final grade will be based on class participation, homework assignments, and the final report as a form of a Web page. Basic skills in computing such as using the Internet and word-processing are necessary. (This class will NOT teach students how to use computers.) For more information, contact the instructor by email (inouen@rc.kyushu-u.ac.jp).
授業計画	<p>10/17 Introduction. Using computers. Using 3D-IES. (1) Activate your computer account in Room 136. (2) Review a process of academic debate. If you do not know any textbook, try: http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/gyron.html. (3) Read an article about debating via computer (http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~call/symposium/inoue.html) (4) If you are not good at typing, practice a little. There's a computer program; you will find introduction to "Mika Type" at http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/Literacy/link-link.html!)</p> <p>10/24 Register your Handle Name & password in the 3D-IES system. 3D-IES HP: Virtual University Park (Registration, Manual, etc.) (1) Read "manual" (マニュアル→ユーザー登録→ユーザー登録) (2) Register your name (Registration→新規登録) <u>List of IDs and Names for this class</u> (Type your ID & Name exactly as listed. Your name here may be different from your real name.) (3) Making up 5 groups of 4-5 members. Homework: Bring ideas about debate topics.</p> <p>10/31 Finding debate topics you and your classmates are interested in. <u>the tasks for today.</u></p> <p>11/7 Basics in debate. (Chapter 2) Writing an essay and publishing it on the Web. Deciding the resolution for debate. <u>groups & propositions.</u></p> <p>Homework: (1) Make a list of information sources. (Due 11/21) (2) Make a list of case ideas. (Due 11/14)</p>

	<p>11/14 Writing/uploading "intro.html" & "info-list.html" files. <u>Class Homepage (Links to students' Homepages)</u></p> <p>Practice "chat" in the 3D-IES</p> <p>Analysis of the resolution. Homework: Write the 1st Constructive Speech. (Due 11/28)</p> <p>11/21 Uploading the initial list of information sources. Chat: informal debate. <u>the tasks for today.</u></p> <p>11/28 Uploading the 1st Constructive Speeches. Chat: cross-examination. <u>groups, propositions, speeches.</u></p> <p>12/5 Uploading the revised 1st Constructive Speech. (500 words) Chat: Practice Cross-Examination.</p> <p>12/12 Uploading the 2nd Constructive Speeches. (500 words) Chat: Cross-exam 2nd Constructive Speech.</p> <p>***New seating arrangement: Each team can sit together but the opposing "teams" should be seated away from each other.</p> <p>12/19 Uploading the 1st Rebuttal Speeches (300 words)</p> <p>1/9 Uploading the 2nd Negative & Affirmative Rebuttal Speeches (300 words).</p> <p>1/16 Upload revised speeches. <u>Final Debate Speeches & Critiques (frame version)</u></p> <p>1/23 Evaluating debate (Chs. 10 & 11 of the Text) Each debate on the web will be observed by 4-5 students and judged. For next week, write an evaluation of a debate in a file: evaluation.html Inside, you will write your ID, Name, the Group you observed, the proposition, your decision (winner), reasons for the decision, and comments (good points, suggestions for improvement).</p> <p>1/30 Reviewing the debates on the web. Preparing for the final report. Upload the evaluation of the debate you observed and judged (evaluation.html).</p> <p>2/6 (Classroom change: #35 of the Main Building) Final report due. Submit all files in a floppy disk. Files to submit: (1) evaluation.html (2) all speeches (individually or by group/team; Make sure that all the speeches of your team are submitted to the instructor.) (3) an essay of your personal opinion about one proposition (one that your group has debated or one that you have judged)</p>
授業の進め方	<p>Class is conducted in English as much as possible. Chat via the 3D-IES may be used for class discussion & cross-examination in debate. Web pages will be used to post debate speeches.</p>
教科書及び参考図書等	<p>Narahiko Inoue, Debate: A Process of Inquiry and Advocacy (Http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/debate-text.html)</p>
試験・成績評価等	<p>To be announced in class.</p>
ホームページ	<p>http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/</p>
その他	<p>Office hours: Friday 10:30-12:00 or by appointment. Contact the instructor by phone: 092-726-4667 (office) by mail: inouen@rc.kyushu-u.ac.jp. (http://hesvr.rche.kyushu-u.ac.jp/syllabus/showsyl.cgi?p=2001.1&i=56211000-59000017-22)</p>

* 下線部は該当ページへのリンク。

付録6 Web版ディベート発表例 (フレーム版)

<p>2001 Fall Wednesday 2nd Final Debates</p> <p><u>Group 1</u></p> <p><u>Group 2</u></p> <p><u>Group 3</u></p> <p><u>Group 4</u></p> <p><u>Group 5</u></p> <p><u>back to groups & propositions</u></p> <p><u>back to syllabus</u></p> <p>Note: Opinions expressed in these debates (in fact in any academic debate) are NOT necessarily the students' personal beliefs or opinions. The students represent the assigned sides of the resolution and try to present possible arguments.</p>	<p>Group 1 Resolved: That Japan should abolish death penalty.</p> <table border="1"> <tr> <td>AFF:</td> <td>1LA10XX</td> <td>1LA10YY</td> <td></td> <td>NEG:</td> <td>1LA10PP</td> <td>1LA10QQ</td> <td>1LA10RR</td> </tr> <tr> <td></td> <td>1AC</td> <td>1NC</td> <td>2AC</td> <td>2NC</td> <td>1NR</td> <td>1AR</td> <td>2NR</td> <td>2AR</td> </tr> </table> <p>Students' Evaluation (Group 2):</p> <table border="1"> <tr> <td>1LA10AA</td> <td>1LA10BB</td> <td>1LA10CC</td> <td>1LA10DD</td> <td>1LA10EE</td> </tr> </table> <p>Intensive English I Group I NEGATIVE Second Rebuttal speech</p> <p style="text-align: right;">Prof. Narahiko Inoue</p> <p>Affirmative team refers to "Oumu Shinrikyo", which is a religious group in Japan, and "Chikatetsu Salin Jiken". The case is a terrorism which the cult used a poison gas and killed innocent people in a subway. The case made national people scared too much. When we think the case and terrible murders the group committed, what we want the government to do is to get rid of our worry and make us feel justice. That is to say, the government have to keep the social order. Committing death penalty means the government's attitude that people who committed a serious crime have to take a reasonable punishment. Our fundamental human rights are defended in a safe social order. According to a public opinion poll, 60 percent of people answered "Death penalty should be continued."</p> <p>You say that the man who takes death penalty is innocence. It is true. But there is a different problem. The man who takes death penalty keeps order of law. So they takes death penalty. They have no bad intention. But murderers kill others with their bad intentions such as disliking a man or hating a man and so on. They corrupt the order of law. To recover the order of law, it is natural that criminals are killed by the government.</p> <p>Even if criminals who commit serious crime are punished by life imprisonment, criminals could live freely in society. This is because the government often reduces criminals' punishment, which is called "Onsha" or "Taisha". This is performed when celebrate things such as Japanese prince, who is called "Koutaishi" being born occur. So, there is a probability that criminals can live freely, which makes innocent people fear. For people to live peacefully, criminals who commit serious crime should be killed by the government.</p> <p>On top of that, if criminals who commit serious crime are killed by the government, victims' sorrow may be reduced. Certainly, it isn't beneficial for economy that criminals are killed by the government. But, victims' sorrow can't be reduced forever if criminals are alive.</p> <p>So, death penalty should be performed by Japan.</p>	AFF:	1LA10XX	1LA10YY		NEG:	1LA10PP	1LA10QQ	1LA10RR		1AC	1NC	2AC	2NC	1NR	1AR	2NR	2AR	1LA10AA	1LA10BB	1LA10CC	1LA10DD	1LA10EE
AFF:	1LA10XX	1LA10YY		NEG:	1LA10PP	1LA10QQ	1LA10RR																
	1AC	1NC	2AC	2NC	1NR	1AR	2NR	2AR															
1LA10AA	1LA10BB	1LA10CC	1LA10DD	1LA10EE																			

<p>Evaluation ID: 1LA10AA Name: Hanako Kyudai</p> <p>Group I observed: Group1 Resolved: That Japan should abolish death penalty.</p> <p>My decision is that the winner is the negative team. Reasons for the decision are following.</p> <p>First, the meaning of the first affirmative constructive speech is not being able to understand. But negative team has plain speech.</p> <p>Second, negative team answers the affirmative's question; "Does the death penalty really deter violent crime?" in second constructive speech and first rebuttal speech with specific examples. These are persuasive. Against it, affirmative team argues that death penalty doesn't prevent crimes in second rebuttal speech. But there are no reasons about it. Affirmative's argument is weaker than negative one.</p> <p>Third, the negative team is good at rebutting. Negative team rebuts most affirmative's arguments. It can be seen in first rebuttal speech and second rebuttal speech. But affirmative team doesn't rebut them. From this, the negative team is stronger than affirmative team.</p> <p>Fourth, the affirmative team has no specific examples. Its most opinions start with "I think". It is weak as argument. With more reasons and specific data, it will be more persuasive.</p> <p>Because of the three reasons, I decided the winner is the negative team. Negative team's rebuttal speech is good. And its reasons are persuasive. These are good points. Affirmative team's new way to solve this problem is good. But it has few persuasive. Affirmative team should write more reasons of its opinions and specific data. If it does so, its opinions will be stronger.</p>
--

* フレームは九州大学六本松地区サーバーの筆者のサイトにある：
<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/2001f-wed2/index.html>. 各スピーチと評価報告はそこからLaputa Projectサーバーにある学生のファイルにリンクを張っている：<http://laputa.rcedu.kyushu-u.ac.jp:8000/3d-ies/userDir/>。評価文は実際のサイトではスピーチ同じフレームに表示される。上の表示例では個人情報の削除など若干の変更を加えている。英文は原文のまま、訂正などは加えていない。